

出典：『堤中納言物語』「ほどほどの懸想」／弘前大学 95年

## 現代語訳

(賀茂神社の) 祭りの(陰曆四月の中) 頃は、(時節がら) なにもかも当世風に見えるのだろうか、見すほらしい小家の半部も、葵などを飾って(見た目にも) 気持ちよさそうである。女童たちが、袴や袴をさっぱりときれいにして、いろいろな物忌み(のしるしの札) などをつけ、顔を美しくよそおって、自分も(誰にも) 劣るまいと競い合っている様子で(通りを得意げに) 行き来するのは、(明るく) 華やかに見えるが、ましてその(女童たちと同じ) 身分の小舎人童や隨身などは(この女童たちの美しさに心をひかれ)、特別に気にかけるのもっともだ。それぞれふさわしい相手を考え定めて、(その場かぎりの恋を) 語りふざけるのも、どれほど確かな(成果をあげる) ことでもあるまいよと(見えるが)、(そのような様子が) 多く見られる中に、どこの(屋敷に仕える女童) であろうか、薄(紫色) (の衣) を着て、髪(の長さ) は身の丈ぐらいある(娘で)、頭の格好から、物腰すべてたいそうすぐれて美しい(女童) を、頭の中將に仕える小舎人童が、理想通りの相手だと思つて、見事に実つた梅の枝に、葵を飾りつけて(その女童に) 渡そうとしながら、

**A** 梅が枝に……梅の枝のこのすばらしい実りに託して、私の恋も実を結ぶようにと、深く神頼みをして願うことだ。今日だれもががさず葵のその根ではないけれど、逢う日を得て共寝までも期待したいことです

と言うと、

**B** しめのなかの……注連繩しめなわをめぐらした賀茂神社の境内の葵にかかる木綿ゆうわたかすがが、いくらあなたが手繰つても根が長くて尽きないように、あなたがいくら通つて来ても共寝は長い先のことで、目的はかなえられないものと覚悟してください

と、つっぱねて返事をするのも、気がきいている。(小舎人童は)「ああ、小憎らしい言い方だよ」と言つて、(手にした) 笏で走り寄つて叩く(まねをする) と、(女童が)「ほらね、(その笏で打つような) なげきをお見せになるのが気にくわないから(あなたのおっしや

ることへの返事は慎重なのです」など、それぞれの身分相応に、互いにひどくいたいと思う気持ちを抱いているにちがいないようだ。その後、(二人は)いつも足を運んで逢瀬を重ねて語り合う(仲となる)。

**解答**

問1 ① 葬祭り(賀茂祭り・北祭り) ② 賀茂神社

問2 ① 見すばらしい ② さっぱりときれいに ⑤ それぞれの身分相応 [いずれも解答例]

問3 ③ 自分も誰にも劣るまいと競い合っている様子で通りを得意げに行き来する

④ どれほど確かな成果をあげることでもあるまいよ

⑥ 互いにひどくいたいと思う気持ちを抱いているにちがいないようだ [いずれも解答例]

問4 女童たちと同じような身分 [解答例]

問5 A 葬(葬)と「逢ふ日」・ね(根)と「寝」

B 練れど(練れど)と「来れど」

問6 「知らなむ」は「なむ」があつらえ(他への願望)を表す終助詞で、「分かってもらいたい」の意。

「知らなむ」は、「な」は確述(強意)の助動詞「ぬ」の未然形、「む」は推量の助動詞「む」の終止形で、「きっとわかってくれるだろう」の意。 [解答例]

問7 いらふる

問8 『源氏物語』・『浜松中納言物語』・『夜半の寢覚』・『狭衣物語』・『とりかへばや物語』  
(以上のうち、三つを答えればよい)

出典：『閑居友』巻下「八 建礼門女院御庵に忍びの御幸の事」／東京学芸大学 99年

現代語訳

(平家滅亡の翌年にあたる) 文治二年(一一八六)の春、建礼門院(平徳子)さまが、出家して(大原に)籠もって暮らしておいでになる草庵に、「(女院は)今ごろどのように(暮ら)しておいでになるだろうか」と(思っ)て、夜更けに、人目に付かないようにしながらの(後白河上皇の)お出ましがあった。

その(女院が)おいでになる草庵に、たいそうみすばらしげな尼で、年老いている(人)がいたので、(上皇が)「女院はどこらにおいであそばすのか」とお尋ねあそばしたところ、(尼は)「ここより上の山に、(仏前に供える)花を摘みにお入りあそばしました」と返事した。(上皇はその返事を)たいそうしみじみといたわしいこととお聞きあそばして、「どうしてまた、(たしかに)出家したとは言うものの、自分で(花など摘むようなことをなさることがあろうか、そんなことは身の回りの者に任せておけばよろしからうに)」と(女院のことを)申しあげなされると、尼の申しあげるには、「(女院さまが)御出家あそばしますおつもりであるからには、どうしてそのような(御自分の身の回りのことは御自分でなさるといふ)御勤行もないことがございましょうか(、いいえ、あつて当然でございます)。(天上界の)尊利天(に生まれ変わつて)の未来永劫にも等しい安楽や、大梵天(に生まれ変わつて)の深い悟りの安楽(のような来世での安寧)にも、このようなお勤めの力によって、お会いあそばすことになるのではありませんでしようか。つらい現世を離れて、仏国土に生まれ変わろうと願うような人は、どうして、(現世を)捨てる(ということ)であれば、(仏道修行に対する)怠け心があつてよいはずがございましょうか(、いいえあつてはなりません)。(女院さまは)前世においてこの(今行つておいでになる)ような善根を積むことがなかったからこそ、このようなつらい人生に直面なさ(つておいでにな)ることなのでございましょう」といったものだ。(それを聞いて上皇の)子供の人々も、「(この尼さんは、しおたれた)姿に似合わない(道理に合った)言葉だなあ」と口々に言い合い、また、上皇も感慨深くお思いあそばした。

(するとそこへ)山の上から、尼が二人下りてやつてきた。一人は花(を入れた)籠を持ち、(もう)一人は薪を拾つて持っている。次第に近づいていらっしやるのを見ると、花籠を持っているのは女院でいらっしやうた。薪を持っているのは、昔(女院が)お側に召

し使つておいであそばした人なのだった。(上皇も女院も) それぞれに涙を流して、(あまりの変わりように宿命を) お嘆き合いになつた。

そうして、控えの間から、(女院は上皇を迎える部屋に) お入りになって、(しとやかに) 御袖を掻き合せて、(上皇の前に) お差し向かい申しあげてお坐りあそばした。(上皇が) 「どんなにか、何事につけても思い通りでないこともございましょうなあ」など、いろいろとお話しかけあそばすと、「どうして不都合にもつらくもあるはずがございましょうか(、いいえ、すこしも苦にはなりません)。(生活の不如意は、かえつて) たいへんすばらしい仏道への機縁でございます。(とは申しますものの、昔のことを) いつも思い出しませので、涙も止まりません。(平家一門の都落ちに際して) 花の(ような) 都を出たときから、振り返つて(都の方角を) 見ると、自分の(本来の) 居所と思われるあたりに、(戦火の) 煙が立ち昇つて、(悲しさに) これから向かう方角もすっかり涙に曇つて、どれが山でどれが河かとも見分けられません(でした)。(一門滅亡の壇ノ浦に近い) 屋島の里に参りましたところ、(まわりの人々は) 以前に見ていた(公家の姿である) 直衣などのようには(とても) 思われず、(公達までもがみな武家の姿に変わつて) 弓矢の他に捧げ持っているものはありません。それで、そこも(源氏方の攻勢を防ぎきるのは) 無理に違いないと(いうことになつ) て、屋島を出て、行く先もわからない海に浮かんで、(船上で送る日々の) 寝起きは涙に沈んでおりましたが、(とうとう源氏との海上の決戦となつて) 船に恐ろしい(源氏の) 武士たちが乗り移(つてまい) りましたので、(幼い我が子である) 帝は(我が母の二位の尼という) 人がお抱きかかえ申しあげて、(帝はそのまま) 入水なさいました。(まわりの) 人々も、ある者は(八尺瓊<sup>やさかひの</sup>) 曲玉<sup>まがたま</sup>を捧げ持ち、(また) ある者は(天叢雲<sup>あめむすぶの</sup>) 剣を捧げ持つて、海に飛び込んで、『あ(の先にお沈みになった帝) のお供として(海に) 入りました』と(神に向かつて) 名乗つた声だけ(を残) して、消えてしまいました。(船に) 残つた人々も、目の前で(斬られて) 命を落とし、またある者は、(源氏方の武士がその人を) 縄でがんにがらめに縛り、動きを封じます。(源氏方の武士たちは) 少しも情けを掛けることはありません(でした)。(そうなる少し前のこと、) 今は(もうこれまで) と(思つ) て、(私も) 入水しようとしたときは、焼き石や硯など(の重そうなもの) を懐に入れて重しにして、(二位の尼が幼い) 帝をお抱き申しあげて、まずは(皇祖神である) 伊勢の大神宮を(帝に) 拝ませ申しあげて、次に(阿弥陀如来のおいでになる) 西方浄土を拜んで(帝が海へと) お入りあそばしたときに、自分も(追つて海に) 沈もうといたしましたところ、『女性については昔から殺すことはありません。(あなたは) きつと(この世に) 残り留まつて、どんなことになつても(帝の) 菩提をお弔いになるがよい。親子の(間柄で) 行う弔いは、必ず(弔われるほうの極楽往生が) かなうことです。(あなたが死んでは他に) いったい誰が帝の菩提をも、私の菩提をも弔いましょうか(、いいえ、帝も私も往生の望みがなくなる

のですよ』と（いう母・二位の尼のお言葉が）あった（からこうして生きている）のですが、帝は（幼くて）何もわからず、（元服前のあどけない姿である）振り分け髪にみずら（の髪型）を結って、青（緑）色のお召し物を着ておいでになった（ままで海に沈んでおしまいになった）のをお見送り申しあげたあとは、（私は生きた）心も消え果ててしまつて、今日まで生き永らえることができると思われませんでした。けれども、（帝と母の）菩提をお弔い申しあげようと（思つ）て、（自分の）身をないものと思い、命を大切に思わずに、お祈り申しあげるのですから、どうして多くの仏さま菩薩さまも（私の思いを）お受け入れくたさらないはずがございましょう（、いいえきつとおわかりくださいます）。こういうわけで、これ（＝現在の暮らし）にもまざる仏道への機縁はないと思わずにはいられないのでございます」と、（女院は上皇に）申しあげなされた。

そうして、夜も更け、月も（西に）沈みそうになつたので、（上皇をはじめ）お供の人々も涙にうちひしがれては、帰っていったと（いうことだ）。

### 解答

問1 (1) 建礼門女院

(2) 院

(3) いとあやしげなる尼（の、年老いたる）

問2 女院さまが御出家をなさる目的のためには、どうして仏前の花をご自分でお摘みになるといふような御勤行もなさらないことがございましょうか、いいえ、なさつて当然でございます。〔83字・解答例〕

問3 院の従者たちが、老尼の「仏道修行に身分は無関係だ」とする態度を、尊いものと評価している。〔44字・解答例〕

問4 尼二人が遠くてだれだかわからない段階では敬語での待遇がないが、近くなって女院がその人とわかつてからは女院を尊敬補助動詞「給ふ」で待遇して劇的效果を高め、さらに過去の女院が宮中にいた時代の説明部では女院を最高敬語「せ給ふ」で待遇することでの流れを暗示している。〔130字・解答例〕

問5 (a) 源氏方の武士たち

(b) 少しも情を残す事なし（22行目）

問6 (ア)「確述の助動詞「ぬ」の未然形+意志の助動詞「ん」の終止形。「確述」は「強意」または「完了」も可。また「ん」は「む」も可。

(イ)「強意の係助詞」。

問7 まだ幼い我が子・安徳天皇があどけない姿で入水するのを目前にして、女院の母・二位の尼から天皇や尼自身の菩提を弔うことを託されても、自分だけ生き残らなければならないつらさに、生きる氣力を失う氣持ち。(97字・解答例)

#### 解説

問1 主語の判定問題。文脈をたどりながら考えていこう。

(1)は、建礼門女院を訪ねた人物の心中語である。それゆえ、主語の可能性としては、訪れている人物本人と建礼門女院の二つがある。このことを念頭に置いて傍線部を見てみよう。すると、「いまそかり」は「あり・をり」の尊敬語で「いらつしやる」の意だから、移動中の人物が自分のことを「あり・をり」と捉えることも変だし、尊敬語を使っているのも不自然である。また、推量の「む」が付いていることから、これは「忍びの御幸」をした人物が、建礼門女院はどのようにしていらつしやるだろうかと思いつながら出かけたと解するのが自然である。それゆえ、主語は「建礼門女院」と判断する。

(2)と(3)は一緒に考える方がわかりやすい。ここは建礼門女院の籠り所に到着した院と尼との会話である。どちらがどちらかということは、敬語の有無で判定するのが簡単。「せ給ふ」という《最高敬語》で遇される方が院であり、尊敬語の付いていない方が尼である。ちなみに、(2)の主語が「院」であることは後に「院もあはれにおぼし召したり」とあることからわかるが、実は2行目「御幸」からもそのことはわかる。一般に、「御幸」とあれば院や上皇のお出かけ、「行幸」とあれば天皇のお出かけ、「行啓」とあれば中宮や東宮のお出かけを示すことが多い。

問2 「させ給ふ」を訳すためには、おなじみの「さす」の識別をクリアする必要がある。《使役+尊敬》か《尊敬+尊敬》かということであるが、この識別は「させる」という意味が認められるかどうかで判定するのが常道である。この場合は、「建礼門女院が出家をする」という内容なので、「させる」という《使役》の意味を認めることは不可能である。よって、この「させ給ふ」

は《尊敬+尊敬》の《最高敬語》と判断する。また次の「はかり」は、重要古語というわけではないので知ってはいなくても仕方がないが、「目当て」の意。恋人（女）が突然姿を消すという文脈で、「いづこをはかりとも知らず（どこに行ったのか見当もつかない）」のように使われたりする。それゆえ、ここまでを逐語訳すれば「出家なさる目的のためには」となる。

さて後半部だが、ここで注意したいのは「いかでか」である。この「いかで（か）」は、《願望・意志》の文脈で「何とかして」の意になる場合と、《疑問・反語》の文脈で「どうして〜か」の意になる場合がある。この場合は後者で、前後の文脈から《反語》で理解するのがよい。この点に注意して逐語訳すると、「どうしてそのような御勤行もございませんでしょうか、いや御勤行なさって当然です」となる。

以上を組み合わせて傍線部の逐語訳を作ると、「出家なさる目的のためには、どうしてそのような御勤行もございませんでしょうか、いや御勤行なさって当然です」となる。古文の試験で現代語訳（口語訳）が求められたら、まずこのような逐語訳を作るところを目指そう。現代語訳問題というのは語学の試験であるから、「だいたいこんなことを言ってるんだろう」と意識やフィードバック訳しても高得点は望めない。まずは傍線部に対する語学的理解の正確さを採点官に見せつけることである。そして、その逐語訳を土台にして、省略文節の補いや指示語の明確化を行うのである。

この設問の場合、主語の補いと「さる」という指示語の明確化が次の作業ということになる。出家したり勤行したりするのは建礼門女院なので、この点を答案に明示することが主語の補いとしては必要。また、「さる」という指示語の指示内容だが、これは前行の「この上の山に、花摘みに入らせ給ひぬ」を受けている。この言葉を聞いた院が、「出家したとはいえ建礼門女院ともある人物が、自分自身で仏前に供える花を摘むとは」と驚いたのに対する、尼の言葉が傍線部なのである。したがって、先の逐語訳に①「女院」という主語と②「（仏前に供える）花を摘む」という指示内容を補って答案とする。

**問3** この答案で明らかにすべき内容は四点。設問にある通り、①誰が②誰の③どのような様子を④どのように評価しているか、である。順番に考えていこう。

①誰がについては直前に「御供の人々」とあるので容易。ただし、「お供の人々」では説明として不十分。誰のお供かがわかるように、「院のお供の人々」「院の従者たち」などとする。②誰のも、文脈から容易に分かるだろう。「いとあやしげなる尼の、年老いたる」なので、「老尼」などとする。解答例では、字数の関係からここまで留めたが、「いとあやしげなる」という要素を盛



り込んで「みすばらしい格好の老尼」などとしてもよい。

と、ここまでは容易に解けるのだが、少し難しいのが③である。内容を踏まえながら考えていこう。傍線部に「物いひ」とあるので、老尼の発言内容に着目するという方針はすぐに立つだろう。あとは、うまくこの内容をまとめることだが、その際のポイントとは、問2でも述べたように、「出家したとはいえ建礼門女院ともあろう人物が、自分自身で仏前に供える花を摘むとは」と言う院に対して、仏道修行に身分などは関係ないと老尼が主張している点である。つまり、③については、この仏道修行に身分は無関係という老尼の態度を指摘することが必要条件となる。次の④だが、これは同じく傍線部の「あはれなる」という言葉を踏まえる。みすばらしい格好に似合わず、立派な発言をしたことに対する評価なので、「すばらしい」「尊い」などの言葉で説明する。

#### 問4

設問の意図がくみにくいかもしれないが、ここで問われているのは「敬語の使われ方」である。それゆえ、この敬語は尊敬語であるとか、ここでは誰の誰に対する敬意が払われているなどということを説明しても、「使われ方」の説明をしたことにはならないので注意しよう。あくまでも、敬語の使われ方という視点に即して考えていかなければならない。

まず、ここに用いられている敬語を抜き出してみよう。

- ア やうやう近づき給ふ
- イ 女院にてもものし給ひけり
- ウ 召し使はせ給ひける
- エ あきれあひ給へり

最後のエは、院と女院が主語だが、残りの三つは女院が主語である。とすれば、女院に対する「敬語の使い方」を分析することが求められているのだと分かるだろう。この点から、ア・イ・ウの敬語を見ると、ア・イは単なる尊敬の補助動詞「給ふ」であるのに対して、ウは「せ給ふ」と《最高敬語》の形になっている。これは何故か。注目したいのが、ウの直前にある「昔」や「召し使ふ」という語である。つまり、ウは過去の女院を叙述する文脈で用いられているのである。これに対して、ア・イは現在つまり出家後の女院を語る文脈での用法である。とすれば、右に見た「給ふ」と「せ給ふ」の使い分けは、出家前後の女院の立場の違いを表現しているという観点から説明すればよいことになる。

しかし、ここでやめてしまっただけではない。「敬語の使い方」の説明とは、何も実際に使われている敬語の説明ということだけ

ではない。敬語が使われていないことも、立派な「敬語の使い方」である。(受験古文という点からは不要な知識だが、古典文学研究においては敬語の不使用に対する研究が盛んに行われた時期があった。物語のある登場人物について、通常は尊敬語で遇するのに時々その尊敬語が用いられない場合があるのだが、それは何故かということに関する議論である。このことは舞台裏の事情なのであるが、しかし「敬語の使い方」を受験生に聞こうという出題者は当然このような研究を踏まえているはずなのである。とすれば、この観点から見ても、女院に対する敬語の不使用についても説明しないと答案としては不十分ということになる。)それゆえ、「山の上より、尼二人下りたりけり」などにおいて、敬語が用いられていないことにも言及する必要がある。では、何故ここでは敬語が用いられていないのか。それは、この段階ではまだそれが女院であると分からなかったからであろう。

以上をまとめると、女院と判断できない段階では敬語を用いず、女院だと分かった段階で「給ふ」を用い、さらに過去の宮中時代の内容を述べる文脈では「せ給ふ」という《最高敬語》で遇しているということになる。この三点を指摘して初めて、「敬語の使い方」を説明したことになる。

**問5** 「具体的に誰を指すのか」と問われても、本文中に具体的な人物名が登場していないので、このままでは解けない。そのことに気づけば、古典常識ないし歴史知識を使って解いていくという方針が見えてくるだろう。逆に言えば、この設問は、半ば受験生の古典常識ないし歴史知識を問うているということである。そこで、使えそうなヒントを探すが、注にある「平清盛」や「安徳天皇」などの言葉に気づきたい。安徳天皇が入水するというのだから、これが源平合戦(壇ノ浦の合戦)を指しているのは、ほとんど明らかだろう。とすれば、「恐ろしき者ども」とは具体的には「源氏方の武士たち」ということになる。

また、女院が彼らを非難している一文だが、これは傍線部前後を丁寧に探すしかない。そうすれば、「少しも情を残す事なし」が発見できるはずである。

**問6** 「なむ(ん)」の識別は受験古文の常識中の常識。こういう設問では、しっかり得点できるようにしたい。

「なむ(ん)」には、①終助詞②完了の助動詞「ぬ」の未然形+推量の助動詞「む」③係助詞④変動詞の未然形の一部+推量の助動詞「む」の四種類がある。識別の仕方としては、まず④「死なむ」「いなむ」でないかを検証し、④でなければ、未然形+なむ↓①連用形+なむ↓②それ以外+なむ↓③と考える(形容詞の場合は少々複雑になるが、上が基本的な対処の仕方である)。

この点から設問に対応すると、(ア)の「なむ」はラ行四段動詞「入る」の連用形に付いているので②、(イ)は格助詞「と」に付いているので③である。

#### 問7

「気持ちの説明」が求められれば、基本的には心情とそれを引き起こした出来事をセットにして「〜に対する…」という気持ち」という答案を作るつもりで考えていくとよい。ここでもその方針で考えていこう。

まず、「…」に相当する女院の気持ちだが、傍線部にある「心も消え失せ」「今日まであるべしとも覚えず」がヒントとなる。「心も消え失せ」とは「気力を失うこと・意気消沈すること」であり、「今日まであるべしとも覚えず」とは「今日まで」生きながらえることができるとは思われなかった」ということである。これを二つとも並記する形で述べるのも一つの手だが、しかしよく見ると後者の気持ちは前者の延長線上に出てくるものであり、一つにまとめることも可能である。気力を失ったために長生きできるとは思えなかったということなので、「生きる気力を失った」くらいにまとめてしまおう方がよいだろう。

次に、そのような気持ちを引き起こした「〜」の説明だが、この時の女院が経験したことは、

① 「女人をばく我が後世をも弔はん」と二位の尼に頼まれた

② 「何心もなく奉りたりし」という安徳天皇の様子を見た

の二つである。それゆえ、この二つの事柄が女院にとってどのようなものであったかを述べるのがここでの課題となる。生き残って後世を弔うことを依頼されたというものの、あどけない我が子の姿を目の前にしては、とても自分だけが生き残るということに耐えられないというふうに説明すればよいだろう。①と②を葛藤を引き起こすものという視点で捉えることがポイントである。

以上を繋げれば、「生き残って後世を弔うことを依頼されたというものの、あどけない我が子の姿を目の前にしては、とても自分だけが生き残るということに耐えられず、生きる気力を失う気持ち」となる。あとは、これをベースにして具体的な人物名を補うなどして文章に即した説明にしていけばよい。